

富士を見ぬ日

土田龍太郎

一

芭蕉庵桃青白川の關のかなたの道の奥を辿らむとて旅立ちしは、元祿二年彌生の初
つ方なれど、すでに關を越え歌枕を訪ね名所なせいりに遊びて後、名取郡笠島に赴かむとせしは五月
四日のころなりけり。

かの中將實方朝臣、殿上にて大納言行成卿と諍ひありていとなめげなりしさま主上
見咎めたまひ、歌枕見てまゐれとて陸奥に流したまひけり。かの國の守となりし實方、笠島
明神の前を下馬なくしてうち過ぎければ、神のたたりにてやありけむ、馬たちまち踏たふれしま
まに實方やがて息絶えぬること八雲御抄などに見えたり。實方の塚道祖神の社のかたはら
にありたれどいつしか薄生すすきひて荒れはてぬるさま、世下りて訪れし西行、見るになげかし
きままにものせる

くちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄かたみにぞ見る
てふ一首新古今集に載りたり。

そも芭蕉翁の西行上人をひたぶるに慕ひてやまざりしこと弘く世に知られたり。さ
れば殺生石を見るとほどなく那須の蘆野の里の上人ゆかりの遊行柳にわれもしばしがほど
とて憩ひたるときとみには立ち去りがたきままにつひに早乙女らの田一枚植をよゑ終るまで木
の下にやすらひたりしさま奥の細道に記せり。

かくまで西行の跡をしのびてやまざりし芭蕉翁の形見の薄のなほ生ひたるなる笠島
を訪はでやみなむことあるべくもあらず。里人に問ひ聞きし實方の塚のありどころさして
ゆかむと志せれど、ぬかるみにさへられてつひにえたどらぬまま過ぎにしこと同じ旅の記
に左のごとく記せり。

此頃の五月雨に道いとあしく身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過るに、蓑輪笠島
も五月雨の折にふれたりと

笠島はいづこさ月のぬかり道

笠島といひ蓑輪といふもをりからの長雨に名のゆかりあれば、ぬかるみの道のかよひ
がたくなりぬるはむべことわりぞかしと風雅者流の諧謔にとりなしておぼめきたれば、文
の表ばかりは軽やかにも見ゆらめども、日ごろ心にかけてし西行上人と實方朝臣の舊跡をた
だよそに眺めやるのみにて訪はでやみぬるときの蕉翁の心の内まことはいかがなりけむ、

いともほいなくくちをしかりけむこと思ひはかるにたへたり。

とくより戀ひ慕へりし人によきたよりもとめでぬればやがてあひ見むを喜び待ち
みたりしに、思はざるにあらぬさはりの出できてつひにえ會はぬままにやみなませばあい
なきことよなからまし。笠島を訪はで過ぎける芭蕉翁の心、かかるあいなき思ひに似たり
とも言ふべからむ。

二.

道の奥まで旅せし元祿二年に五年先立つ貞享元年八月、芭蕉翁海道を上りて伊勢伊
賀大和まで杖を引きしかど、この道の記、甲子吟行とも野ざらし紀行とも云ひならはしたり。

深川の芭蕉庵を出でて箱根に著きしときのことまづ

關越ゆる日は雨降りて山みな雲に隠れけり

とばかり記せるにただに續けて

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

てふ發句を載せたり。箱根の關よりはさまで隔らで聳ゆる富士の山、もし日晴れたらば
かなたに望まむこと難からねど、あやにくの時雨の空の霧雨にさへられて、靈峰のかげだに
もえ仰ぎ見でやみぬるはうたてほいなかりけむことおしはかるにあまりあり。

桃青翁のみまかりしは元祿七年十月なれど、これにやや先立ちし同じ年の前の五月、

尾張わたりにて

世を旅にしろかく小田の行き戻り

てふ一句をものしたれば、この翁の人の一期を旅に擬へたりしことまぎれなし。

人の世のよろづ望むにまかせずたがふことのみ多きはいまさらいはでもありなめど
も、旅もまたこれに似て、かねて定めしあらましごとには従はで、ややもせばよきにつけあ
しきにつけ、すずろ思ひのほかなることのあれこれいでくるはえさらぬわざなれば、げに旅
も人の世も定めなきこそ定めなるべけれ。

さはれもしなべてのことかねて思ひまうけしにつゆたがはで成り出でなむとせば、
そははたいかがあらまし。かへりてあぢきなくすさまじからでやはあるべき。をりをりは思
ひのほかなることのいでくればこそ、旅も人の世もよしありなさけあるなれ。時雨の雲にさ
へられて心にかけて富士の嶺をえ眺めでやみにしとき、芭蕉翁のあへておもしろしとくち
ずさみたるはかかる不定不可測の理りのふと心にきざしたりしがゆゑにてもあるべし。

げに定めなき旅の空、うきことあればよきこともあり。富士を見ぬままに箱根路を越
ゆるはいかさまうらめしけれど、行く先にまた思ひのほかのさいはひなかるまじきにもあ
らず。されば

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

てふさしもなき一句にこめられし思ひの深きことげにいはむかたなし。一期を旅にな
して世をさすらへし芭蕉庵桃青のつひに至りし悟達の境界、このわづか十七文字をとほし

てさながら垣間見る心地とする。

(令和七年二月二十六日受附)